小学校教科専門『音楽』の授業内容改善
—音楽的基礎能力と指導力の養成を目指して—

平井恭子・川口容子
（京都教育大学・京都教育大学）

A Study for Improving of Music Program for Primary School Teachers
—For Training The Foundation of Musical Capability and Ability of teaching—

Kyoko HIRAI ・ Yoko KAWAGUCHI

2004年11月29日受理

抄録：本学の授業科目「小学校教科専門音楽」は，小学校教員としての指導に必要な音楽的基礎技能を身につけることや，実際の授業実践で使える確かな指導力をつけるという目標がある。また小学校の教員採用試験や教科としての「音楽」には，ピアノが弾けることを要求される場合が多い。そこで数十年にわたって使用してきたピアノ教材が，この目標に到達するのに充分であるか改めて検討することとした。時代の変遷は，学生の興味も変化させ，必ずしもこの教材に満足しているものではなく，内容，教材配列にも問題を含んでいると考えられた。そこで，授業内容を改めて見直し，学生のレヴェルに応じて無理なく音楽性を高め，指導力を養うことのできる指導内容の考察を進めることとした。

キーワード：小学校教科専門音楽，音楽的基礎能力，指導力，表現力

Ⅰ．はじめに

1．授業の現状と問題点

小学校教科専門音楽は，90分の授業のうち前半45分を受講生全員での講義にあて，楽典や合唱，視唱，聴音などの指導を行っている。後半45分は，およそ5～15名の小グループに分けてピアノの指導を行っている。この後半の授業においてはピアノの基礎技能習得のためのテキストとして長年「メトードローズ教則本」から抜粋した曲集と，小学校歌唱共通教材を使用してきた。しかし，この「メトードローズ教則本」からの抜粋曲は，その配列が必ずしも小学校教材の弾き歌いの基礎技術に通ずるものではなく，効率的な学習とはいえない。また最近の学生の興味関心をそそる曲が少なく，学生の学習意欲を高めるまでには至っていない。そこで，まず小学校教員採用試験の内容から，現場の教員に求められている音楽的能力とは何か，分析検討することから始めた。

2．小学校教員採用試験に見られる音楽の実技試験内容

本学の学生が教員採用試験を受験する地域は，過去4年間をみると，京都市，京都府，大阪府，滋賀県，大阪市，神戸市，兵庫県等，近畿地方が圧倒的に多く，教員就職者の74%を占めている。これらの府県や市が音楽実技に関してどのような出題を行ったのか，平成15年度の試験内容を次に示す。

(1) 京都府

①ピアノ演奏…バイエルピアノ教則本80番程度以上のピアノ練習曲の中から，任意の1曲を暗譜演奏。

②ピアノ弾き歌い…歌唱共通教材全24曲のうち，各自が選んだ学年を異にする3曲の中から当日指定の1曲をピアノ伴奏しながら視唱。

(2) 京都市

①ピアノ演奏…バイエルピアノ教則本中程度以上の曲を1曲

②歌唱…「赤いやねの家」

(3) 大阪府・市

①ピアノ弾き歌い…当日指定の一曲。50秒程度のヘ長調の曲。予見時間5分間。

②アルトリコーダー演奏…当日指定の1曲。30秒程度のハ長調の曲。予見時間3分間。

(4) 兵庫県

①歌唱…「われは海の子」を無伴奏で1番のみ歌う。自分の好きな調で歌うことができる。最初の音をピアノでとることができる。

②ピアノ演奏…バイエルピアノ教則本 No.104。音符の長さ、テンポ，強弱をつけて弾く。調は自分の好きな調からはじめてよい。

(5) 神戸市

オルガン演奏…「茶色の小びん」「パフ」「まきばの朝」から1曲選択して，子どもの前で指導していると想定して演奏する。

(6) 奈良県

ピアノ弾き歌い…「かくれんぼ」「春がきた」「虫のこえ」「夕やけこやけ」の中から当日指定する1曲をピアノ伴奏を付けて歌う。

(7) 和歌山県

ピアノ演奏…「スキーの歌」「われは海の子」「まきばの朝」「冬げしき」「こいのぼり」「おぼろ月夜」のうち，当日指定の1曲。

(8) 滋賀県

①ピアノ演奏…(a) バイエルピアノ教則本より，No.59,No.73,No93,No.96 の中から1曲選択，演奏する。

(b) ソナチネアルバムIより，No.8 Clementi Op.36 No.2,No.13 Hydon ハ長調 Hob.XVI35(SONATA)から1曲選択，演奏する。

②ピアノ・ギター演奏…「冬景色」「とんび」「うみ」から1曲を当日指定され，ピアノまたはギターを選択する。楽譜を見ての演奏も可能だが，できるだけ児童の顔を見ながら演奏することが望ましい。演奏前に児童がいると仮定してひと声かける。

以上のように，近畿の県・市別の出題傾向をみると，ほとんどピアノ演奏と歌唱共通教材の弾き歌いが課題となっている。中には階名による新曲視唱（大阪府・市）や，実際に児童がいることを想定した模擬指導（神戸市、滋賀県）なども行われており，単に決められた課題がこなせるだけではなく，受験生各自が持っている音楽的な基礎能力や指導につながる実践力まで求められる傾向にあることがうかがえる。

3. 学生の実態把握と問題点

授業内容を考案する前に，学生の音楽実技面に関する能力や傾向を把握するため，了解を得て，授業内における学生の演奏をビデオに撮った。それを分析および考察したものから見られる問題点を以下に述べる。

(1) 視唱力について

自己表現に苦手意識をもつ学生が多い。音楽表現以前に，「声を十分に出せない」現象が多く見られる。視唱能力としては，メロディが順次進行であったり，4分音符や8分音符が中心である曲の場合，初心者（レヴェルを自己の申し出により初心者，中級，上級に区分けしている）であってもその7割以上の学生が初見で歌うことができる。しかし、メロディに跳躍音程が含まれていたり，リズムにシンコペーションや3種類以上の異なる音価が使用されている時には，ピアノ上級者でさえ歌えない場合が多い[1]。

(2) ピアノ演奏について

楽譜を見てその音を鍵盤上に移すことに精一杯に見受けられる。そのため音楽的に表現する余裕がない場合が多い。初心者ではいわゆる「つっかえ弾き」という現象が見られ，音楽の流れに乗れないケースが目立つ。

(3) 表現力について

リズムやテンポ，音，音程は正しく奏したり歌ったりすることが出来ても，音楽的表現をするには至らない。またアーティキュレーションやフレーズ等の演奏上の知識はあっても音楽として表現できない学生が多く見られた。この現象は上級者にも初級者にも見られる。

上記の問題を解決するために問題点を取り上げ，音楽経験の少ない学生に絞って，音楽的基礎能力や，指導につながる実践力を無理なく身につけることができるようなカリキュラムを考案し，授業内での使用を試みた。

Ⅱ．新しい教材の作成

1. 新しい教材の作成と配列

まず，教材の考案にあたっては，ひく，歌う，動く，創る，鑑賞するの分野をバランスよく取り入れたものになるように工夫をした。それは単なる音の羅列的な演奏ではなく，音に対するイメージを豊富に持たせること，メロディの流れやふくらみを表情豊かに表現できることを目指している。

No	テーマ	内容　　使用曲目	ねらい
1	探そう音を	秋の学内探訪　探す、感じる、表す(試す、選ぶ) 探した音を自由に表現してみよう(創って表現) 鑑賞「サウンド・オブ・ミュージック」、「魔法使いの弟子」 やってみよう、見つけてみよう! ピアノを使った音の実験(いろいろなもので叩いてみる)擦る、吹える	ピアノを使って可能性を探る ペダルの効果
2	ピアノを探検	黒鍵で遊ぼう　黒鍵でお話(二人の対話) 鑑賞　「黒鍵のエチュード」(ショパン) ドの音探し「どんぐりさんのおうち」 鑑賞「愛情物語」 「山の音楽家」…ともだちの歌にあわせてドの音あそび 「ぶんぶんぶん」…ドの音で自由にリズムを創る 「おもちゃのマーチ」…色々な楽器も合わせてみんなで音楽隊あそび	リズム活動(まねっこ遊び) ドの音探し
3	合わせて楽しもう	探した音を楽しもう　前回楽しんだ音楽の活動を膨らませる 歌ったり、弾いたりして役割を分担して楽しもう 「世界中の子どもたちが」(2音)　「動物園へいこう」(3音) 「ジャンプ」(2音)　「大きな栗の木の下で」(4音)	鍵盤の認識 3段譜への慣れ
4	いろいろなメロディーを楽しもう	一指一音五指以内のメロディー奏のチャレンジ!　(伴奏は教師またはFD) 「メリーさんのひつじ」「かっこう」「さよなら」 左手でもメロディー奏にチャレンジ 「リスのないしょばなし」(バイエル8番) ハンドサインを用いて歌う(コダーイメソッドによる)	弾きながら歌う TDSの和音
5	両手でピアノを弾こう①	両手奏のチャレンジ TDの伴奏練習(和音奏)、コードネームの基礎、伴奏型の練習 Tの響き、Dの響きを身体で表現…響きを身体で感じる	TDの和音伴奏型 分散和音 伴奏型を創り出す
6	両手でピアノを弾こう②	簡単な和音づけにチャレンジ Tの和音を聞きながら即興的に歌う．Dの和音を聞きながら即興的に歌う．… 和音に合うメロディーをさがす経験 友達のメロディーに合わせて伴奏してみよう ひとりでメロディーと伴奏にチャレンジしてみよう	No.5の応用 メロディーの創作
7	広げようピアノのテクニック①	CFG調に挑戦 CFG各調のスケールをダルクローズスケールで歌う…主音を感じる 指広げ、指くぐり、指またぎ	手首、腕、指の柔軟性
8	広げようピアノのテクニック②	CFGの調のスケール、アルペジオ、カデンツを覚える 「ドレミのうた」他	音階と和音の練習 ⅠⅣⅤV_7の分散和音の練習
9	いろいろなリズムで動いてみよう	TSDを用いて簡単な曲をいろいろなリズムに編曲する。 「ちょうちょ」を用いて歩く、ワルツ、スキップ、ジャンプの4種類の動きの音楽を創作したり、その音楽に合わせて動いたりする.	伴奏のリズムパターン 動きを引き出す伴奏
10	私は先生	弾き歌い① 低学年の共通教材から「うみ」「春がきた」	伴奏型の応用

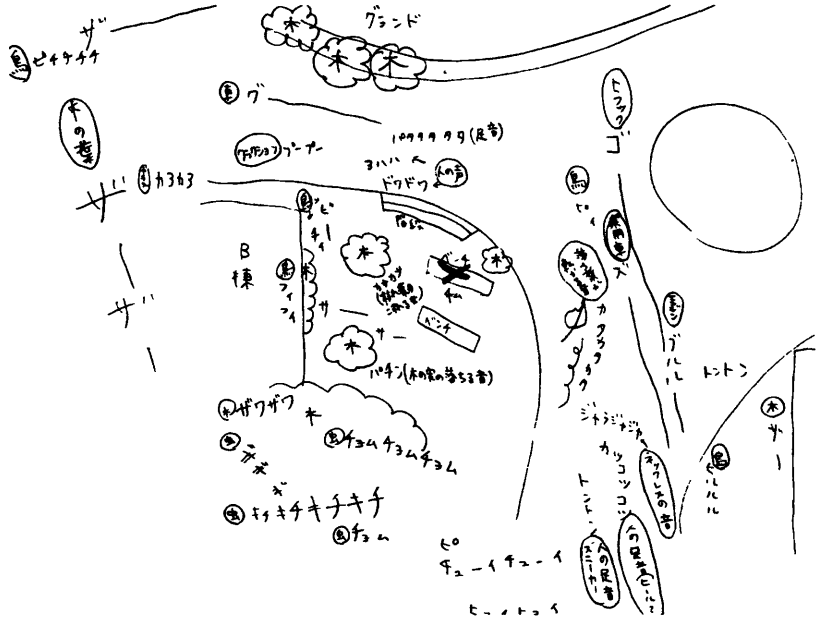
11	ミュージシャンへの道	弾き歌い② 中学年の共通教材から「ふじ山」「もみじ」 歌いながら指揮、指揮を見ながら歌う…ダイナミクス、アーティキュレーションを身体で表現	伴奏型の応用
12	私はミュージシャン	弾き歌い③ 高学年の共通教材から「こいのぼり」「ふるさと」 メロディーのリズムをステップ、指揮しながら歩く	伴奏型の応用
13	創って表現	グループ別表現 音楽作品を身体の動きで表現(プラスティックアニメ)	楽曲理解, 表現力の育成
14	私たちの卒業式	グループ別表現 音楽作品の創作、発表(ボディーパーカッションを用いて)	楽曲理解, 表現力の育成

2. 指導事例

(1) テーマ「探そう音を」から

木の音や風の音など，身の回りの様々な音に関心をもち，耳を傾ける経験をさせる。音を聞き取る経験は，自分の出す音への関心や集中力になり，やがて豊かな音楽表現を生み出す源となる。将来教師となる学生にとって，この経験は非常に貴重なものであると考えられる。そこで、秋のキャンパス内において「音マップ」作りを行った。方法は，キャンパス内を音に注意しながら散策し，気に入った場所に座って，図1に示すように周囲から聞こえてくる音を一つ一つ書き留めるというものである。

図1



この活動を通して学生からは，「耳を澄ますとこんなにもたくさんの音が聞こえるんだと、改めて嬉しくなった」「木の葉が風にざわめく音が木から木に移っていくような気がして不思議だった」「同じ鳥でもいろんな鳴声がある。それらを表現するのはとても難しいと思った」等の意見が出された。

耳を澄まして音を聞くことがとても楽しく心地よい体験であること，そして注意深く聞くことによっていろいろな発見があり，喜びを感じていることが伺える。

サウンド・エデュケーションを提唱したマリー・シェイファーは「教育の中で、五感の教育ほど基本的なものはなく，なかでも耳は最も重要なもののひとつである」ことを述べている[2)]。音マップ作りは，音楽活動の第一歩として貴重な体験となり，そしてこの体験が，イメージをもって音を表現する次の活動への足がかりとなった。

(2) テーマ「ピアノを探検」より

①黒鍵でおはなし

2人（学生A，学生B）がピアノの前に座り，学生Aが黒鍵だけを使った単純なリズムの音を出す。続いて学生Bが同じリズムで，黒鍵だけを使った自由な音で即興的に返事をする。そのやりとりを繰り返す。慣れてきたら，互いに違うリズムを用いて会話をするように奏する。

②黒鍵を使ったイメージ即興

①の活動で黒鍵に慣れたら，次は一人で，何かイメージをつくってそれを音にしてみる。その演奏後，聴いていた学生が，今はどのようなイメージの音楽だったのかを話し合う。

・学生Aの演奏…アルペジオを用い，低音域から高音域へと流れるような音づかい

学生Bの感想(Aの演奏を聴いて)「水に浮かんだ落ち葉がスーッと流れる感じだった」

学生Aのコメント「部屋に幻想的な光が差し込んでいるイメージで弾きました。」

・学生Cの演奏…右手が5音音階を用いたわらべうた風のメロディーを静かに奏でる。時々入る隣り合った2音のトリルが効果的である。左手は主にベースの役割をしている。

学生Dの感想(Cの演奏を聴いて)「おじいちゃんとおばあちゃんがのんびり暮らしてる感じ」

学生Eの感想「小さい子どもとおばあちゃんが遊んでいる感じ」

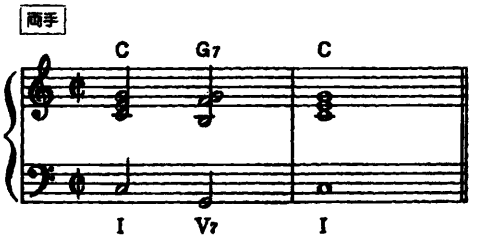
学生Cのコメント「狐の嫁入りのお話をイメージしました。晴れて雨が降って…，という感じを出しました。」

これらの活動を通して，学生はイメージをもって音を出すという体験をしたが，それはとても新鮮なものとして受け入れられた。自分で音をクリエイトするだけでなく，友達が創った音楽を聞くことで音のイメージがより広がったという感想を述べた学生もいる。ニュアンスやダイナミクスをつけて表現をすることも，きまりに縛られない自由な音作りの中だからこそ可能になり，楽しんで習得できると考えられる。

(3) テーマ「両手でピアノを弾こう」①②から

この単元では，コードを用いた簡易伴奏でいろいろな曲の弾き歌いにチャレンジする。最初はCとG_7のコードに慣れることから始める。

譜例1



譜例1のいわゆる「おじぎ」の和音を弾き，その和音を聞いてトニック、ドミナントを身体の感覚で感じる活動を行う。例えば2人が一組になり，向き合って手をつなぐ。そしてG_7のときは緊張を表すようなポーズで待ち，Cの解決音で弛緩する等の動きをする。その後，各グループで考えた動きをみんなの前で発表したが，それを見ることで，視覚的にもコード機能を捉えることができて効果的であった。ほとんどの学生は，小学校就学前からこのお辞儀のコードに馴染んでいたし，教師が弾く姿が記憶にあるのか，初めてこのコードを自分で弾いてみて「なんだか先生になったような気がする」(ピアノ初心者の学生)と述べた学生もいた。

続いて，譜例1のように両手でコードを弾きながらよく知っている歌を歌ってみる。例えば「メリーさんのひつじ」「さよなら」「大工のきつつきさん」「かっこう」「山の音楽家」などである。これらの曲は2つのコードを使うだけで伴奏できるのでコードポジションを覚えるだけで容易に弾き歌いが可能である。このとき，なるべく鍵盤を見ないで弾く習慣をつけておくと子どもの顔を見ながら指導できる力となり、本人の自信にもつながる。

楽譜を読むことが困難な初心者の学生にとって，弾き歌いは一つの憧れであり，それが容易に可能になるコード伴奏は，学習意欲を高める上で効果的である。

この活動の続きとして，コードを弾き，そのコードに合うメロディーを即興的に歌う課題を出す。最初はコードの構成音だけでもよいが，徐々に経過音や刺繍音，係留音などを使わせる。これらは理論を教えるのではなく，はじめは感覚的に和音に馴染み，心地よく聞こえるまたは歌える音を，見つけたり味わったりすることが大切である。歌えるようになったら，次にそれを鍵盤で弾く。さらに五線譜に書くという活動に発展させていく。なお，同様の活動はトーンチャイムを用いても可能であり[3]，その他の楽器で奏することもできる。

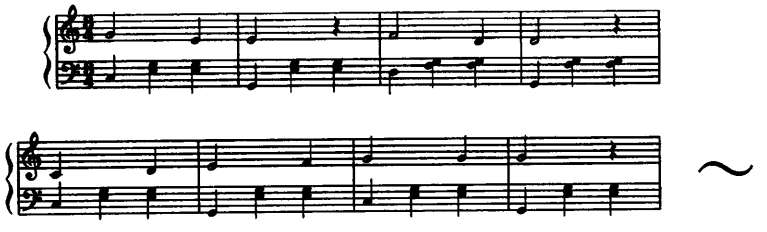
(4) テーマ「いろいろなリズムで動いてみよう」から

この単元では，動きを引き出す音楽創りを行う。動きの音楽を演奏するときに大切なのは，自分が歩いたり跳んだりした時の足裏の感覚がそのまま指先に伝わるようにすることである。このことは、ダルクローズのリトミックにおいても最も重視されている点である[4]。そのため，実際に音楽を聴いて動くことと演奏することを交互に繰り返し行うようにした。はじめに，誰もが知っている簡易なメロディーを使い，それをいろいろなリズムで弾き分けることから始めた。今回使用したのは「ちょうちょ」である。学生の演奏と，それに合わせて動いた学生の反応は以下の通りであった。

①ワルツ「ちょうちょ」でダンスを踊ろう

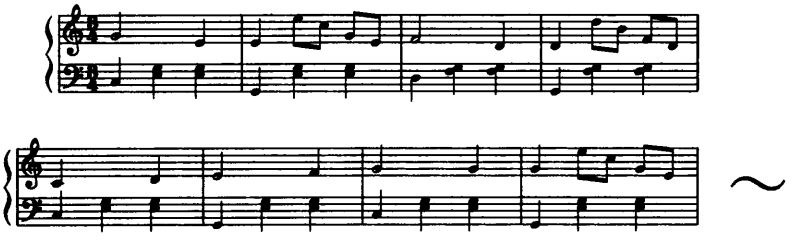
学生Aは譜例2のようにワルツのリズムで「ちょうちょ」を演奏した。

譜例2. 学生Aが演奏した「ちょうちょ」



他の学生は2人一組になって向かい合い，両手をつないで左右に揺らしながら3拍子に合わせて動く。そのうち，学生Bがくるっと回ってパートナーチェンジを行い「こんなの入れるとどう？」と提案した。他の学生も「その方が面白い」と賛成し，それにはどんな合図が必要か考えることになった。それに対して学生Cが譜例3の弾き方を提案した。

譜例3. 学生Cが演奏した「ちょうちょ」

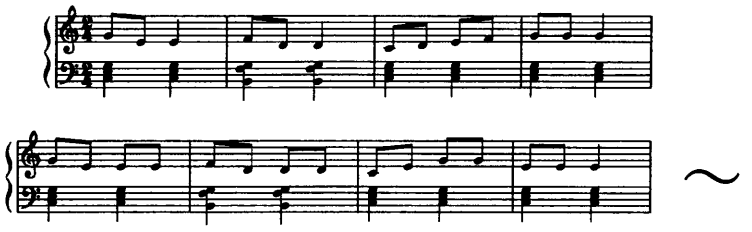


他の学生が学生Cの演奏に合わせて動く。この方法は「変化があって楽しい」し，今度いつ合図がくるだろうと思って「音楽に集中できる」から子どもたちに提供する遊びとして適しているのではないかということになった。

②元気な「ちょうちょ」でジャンプしよう

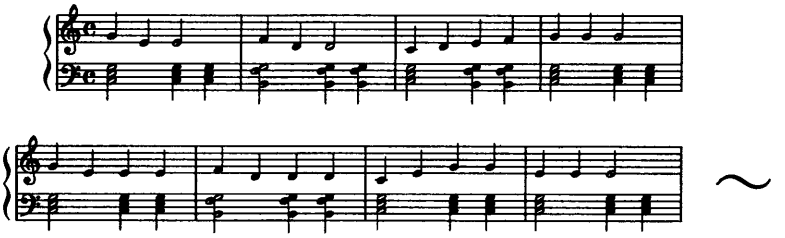
学生Dは譜例4のような伴奏で，ジャンプの動きを引き出す「ちょうちょ」を弾き，他の学生がそれに合わせてジャンプした。

譜例 4. 学生Dの演奏した「ちょうちょ」



しばらく動いてみて，「小刻みなジャンプを連続するのはしんどい」という意見が出て，同じジャンプでも他のやり方はないか考えることになった。そこで学生Eが提案したのは譜例 5 のような弾き方である。

譜例 5. 学生Eの演奏した「ちょうちょ」



学生Eは譜例 5 のように左手の和音のリズムに二分音符を挿入することにより，ジャンプのパターンを変えた。他の学生はことばでの説明がなくても，音楽から要求されていることを聞き取って動くことができていた。

このように，左手のリズムが動きのリズムを決める重要な役割を果たしていることを学生たちは経験から学び取っている。同様に「歩く」ちょうちょ，「スキップする」ちょうちょなど，いろいろな「ちょうちょ」のリズムアレンジを行い，実際に動いたり弾いたりすることを通じてさまざまな動きの音楽を体験した。従来からあるバイエルやソナチネなどのいわゆるピアノのために書かれた音楽と，人を動かす或いは便宜上ピアノを使う時の音楽では，弾き方に多少の違いがある。そのことに学生自身が気づき，子どもたちが楽しく活動できるための音楽上のアイディアを積極的に出して学習できたことはたいへん有意義であったといえよう。

(5) テーマ「私は先生」から

この単元では，小学校共通教材の弾き歌いを行なう。共通教材の中には，左手の伴奏にアルベルティ・バスを用いる曲が多く含まれている。例えば低学年の共通教材から「春がきた」「かたつむり」，中学年の共通教材から「とんび」等がある。

初心者の学生の中には，これらの曲のアルベルティ・バスで書かれた伴奏型を弾く時，困難を感じるものが少なくない。その原因の一つは，一音一音を順次追っていく弾き方をし，音型として捉えていないことが考えられる。そこで，同じような音型を用いた練習曲として次の 4 曲を使用した。

・「バイエル教則本」より 21 番，46 番，55 番

・「小さなピアニストのピアノエチュード」(成田剛)[5] より「とんがりやねの時計台」

これらのうち，バイエル 21 番，46 番，譜例 6 に示す「とんがり屋根の時計台」のように，左手が 4 分音符で成り立っている曲については，慣れた段階で譜例 7 のように 8 分音符の形でも弾けるようにした。

なお，具体的には次のような方法で練習を行った。

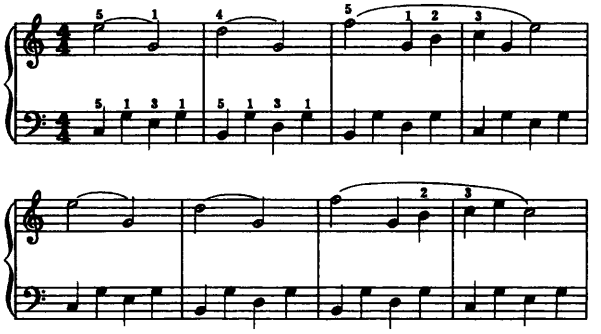
①3和音の形で弾かせる。

②アルベルティ・バスの形を左手だけで弾かせる。その際，手の運動として覚えてしまうまで繰り返し練習させる。

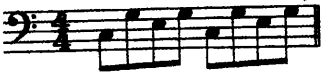
③右手のメロディを歌いながら②を行なう。

④両手で奏させる。

譜例6. 「とんがり屋根の時計台」(成田剛作曲)より



譜例7. 8分音符で構成されたアルベルティ・バスの伴奏型



以上のような手順で学習を行なった結果，読譜上の困難が減少し，余裕をもって演奏できる学生が増えた。演奏上の困難が出てきた時，その原因を分析し，それを克服出来る練習方法や教材を提供することが重要であるといえよう。そのためにも学生を指導する側の教員が，巾広い教材観を持つことが是非とも必要である。そのことは，学生の巾広い教材観を育てることにもつながると考えられる。

3. 結果及び今後の課題

本研究において考案した教材や教育方法を実践する間には，学生に次のような変化が見られた。

- 特に初心者の学生が生き生きと授業に参加できるようになった。
- 楽譜に書かれた音を無味乾燥に再現するだけの演奏から，音符にはかかれていないニュアンスやイメージ等が，演奏に表れるようになった。
- 学生からは，「子どもたちを指導するときにアイディアが豊富になった。」という感想が聞かれた。
- コードの知識をもち，簡易伴奏を自分で作れるようになることで，歌うことに余裕が生まれ，指導に対する自信が出てきた。

このカリキュラムは，まだできたばかりで「小学校教科専門音楽」を受講するすべての学生を対象に使用したわけではない。教材についても，より理解度を高めるものを用いたり作ったりする必要があると考えられる。初心者であっても高い音楽的感性をもった教師に育っていくよう，今後も授業研究を行っていきたいと考えている。

本研究は，平成14年度教育改善プロジェクト経費（学長裁量経費）「歌・楽器・動きを取り入れた音楽教材の作成」（研究代表者、平井恭子）による。

引用・参考文献

1) 田中恭子 2002 幼稚園教員養成における音楽基礎能力の育成－視唱力について－
関西楽理研究ＸＩＸ pp.41-50.

2) R・マリー・シェ-ファー 1992 サウンドエデュケーション 春秋社 p.1.

3）西勇夫・田中恭子・藤原みつる・藤田加代　2003　学校音楽教育におけるトーンチャイムの活用　教育実践研究紀要第3号　京都教育大学教育学部附属教育実践総合センター　pp.61-70.

4）EMILE JAQUES-DALCROZE　1921 Rhythm Music & Education Published by The Dalcroze Society pp.36-46.

5）成田剛　1987　小さなピアニストのピアノ・エチュード　音楽之友社 p .12.